

拜啓

秋冷之候益々清安に添らせられ奉賀上候。

言書方よりハ亦恩を忘れず夫の如し。鑑えし亦ぶ音に所

遇ぎ、失禮多飛。平に而痛知れ奉賀上候。

昨年十月四日私ハナラズブレック・マラン政候より。痲痘起。

飛弱日と共に加はり。年末の便所。とて此世の人には有り

まじと變アキラの中飛候が。今日尚ほ生可く存下り候。たしかに。

皆々様ハ流りキリ而後ハに有る賜に候。再生の恩は、心

に銘じし。おん忘れずしすし候。涙を以て奉拜而禮

申上候。

四顧下れば。世果系玉。人煙が見えぬ處。生流藪の穴

所かざらば非ず候。哀れ有りや。汝娘は鹿リ。悲しき。昔に

耳に満ちる候。三葉無毒。猶如火宅。とて。有る

物言の世の由。候すや。

殊に満州事件の長びと。豊ふて。受しら。打撃の甚しき。

中。同胞社会一枚と見うけまぬら。候。まことに。女

心を許さざるの秋に候。

から折に私ハ。いつまを。一。皆旅立の。重荷と存し。

致

所至接しし以てことば、一は真心の可貴に堪えがたし候、また
二には妻子の在り候に候ゆゑ、子に諭し、妻に諒し、一は
謝散仕る事は致し候。致しは九月以後、所至接の義は、
中極へ此はやゝやう奉託上候。

匡より姑身は、田舎の期ちなき麻痺なりとすれは、專ら
中辭退は致し可し候。在去、痲痺重自年一。一
一退、一書一書、一書一書に哀へる身は、此にせん。

奮起して日たりとし、社和人のために労を辱すも能はずんは、
世の日は所至に存じぬ様は致し候。考へ候。

また、社和人の在り候は、ソツキと、一長懐する病福に
考へ候。世の人に疎きは、親として又夫として忍ぶ能はず候。
不流の身は、志願がごとく子の出世を計らざる所要候。
と云ふに、し直せうまうし候。

一永謝教の決意は今日起りたりし候は、是之候。
春寒科峰、窓外を眺むれば、風さびき、雲みだれ一人
は雲のため、満州の野に足踏を極らし、上海の天空に、
散らし、昔年其流在り、二月の下旬に決けは候。

當時の事と回想すれは、夫は病院にありて氣息奄々、

患

私に療養院に有りて、殊に燈火の滅く産業に候。子は學友の
許に預かりし通ふ所なし。孝行がすめは、父を三時お母を見
舞しし。重に燈火のまたし頃。雪ふがき、林鹿の跡を。一哩
事ほど徒歩するが、護法の曰課 ~~に~~ 存候。

この春は、不時の用意に新ちたため、村の人、または友人たちには
勤からぬ迷惑を相可申候。慚愧骨にしや候。かゝるこ
とは決しし。繰返さぬやうに致したき、存候に候。

宵言ふを飯屋の上、集かに離散の境境に候が、観ずれば
新島は、端ぎ何んが、夏、汗の二食を調料しうるみに
終日燈座、二振敷のへに有候。

また遊し其痕根を訊ぬば、過去十一年方、正れを忘れし、
夫と取らんかための看護にいましめ、過分の結果、急性肺
炎と有りて、ぶつたふれた。改業に候。

かゝることに考とめじらせば、五折折き、離散の一法は、唇頭に上
ぼすべし。其候。去りしとまた、日皆様に申しすまない。
なごと思へば、進退ここに出来りて、熱い涙が流るゝのみ。存候。

しかるに、赤鳥庇に有りて、九天の雲晴れと、思ふは全快い
たし申候。山間の月日はやがに相玉候ふ。私はまじく元年付。

端の松凡凱とて、奮起とうあかし。ふは益之強健に、十とし
 の各王近ひ平候百、右、左他事、而心おん休め、右、左上候。
 可愛い子には、旅をまけれと。讓名は今、社より、働きつゝ、学ば
 学びつゝ、働かんとして、其、才、行の、旅に出せり、たせ申候。可
 し、二年の、任は、トルドウ院長、ドクター、ハイスイの、尾に候。
 拙妻は、紐帯におど、舊職に復す。た、た、ずんば、田夫のため、
 子のお世のため、どん、在、働、せ、し、た、し、あ、り、と、流、刺、た、る、と、申、申、候。
 候。

秋凡にひと、吹、か、れ、を、ま、け、し、

やせたり花の、何、は、れ、た、ら、な、か、た、

古歌

私は郡立病院の人となり、淋しく暮す患者を慰めし。また慰
 められし。養病可仕候。そうし、隠忍自産、後年、妻、子、が
 近ひに、来り、果し、い、日、を、待、考、に、候、

揮具。

昭和七年九月 日

おびし、病、庵、に、

妻、元、岩、考

巖

至、机、下